
孤独な俺と無邪気な君と

大空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独な俺と無邪気な君と

【Nコード】

N2726X

【作者名】

大空

【あらすじ】

ありふれた日常に退屈し、いつも一人でいた俺が転校生の長塚有希と出会い関わっていくことで少しずつでも確実に成長していく学園ラブコメディ。

プロローグ（前書き）

皆様始めました。大空と言います。この作品は私の処女作になります。どうか生暖かい目で読んでいただけると嬉しい限りです。

ブローグ

黒板に字を書いている教師の背中を見ながら俺は思う。

何故こんなことをしているのだらうと。

いつものように朝起きて、学校に行き、授業を受け、家に帰る。

そんな当たり前の毎日を何度も繰り返す。

いつか学校を卒業し適当な仕事に就き生きるために働く。

特に夢も目標も無い俺はきっと将来そういう風になるだらう。

キンコーンカーンコーン

チャイムが鳴り授業が終わる。

これで今日の授業はすべて終わった。

あとは帰るだけ。

俺は急いで帰る支度を始める。

担任が教室に来て帰りのHRを始めた。

俺はすべての言葉を聞き流し、クラスの委員長が号令をすると同時に俺は教室を出る。

俺こと宮野和也は平凡な高校二年生だ。俺が通っている光坂高校は家から最寄りの駅で一駅乗り継いだところにある。光坂高校は偏差値が高いわけでも低いわけでもない普通の高校だ。何故俺がこの高校に受験をしたかというと、単に確実に入れると思ったからだ。俺の成績は大体中の上ぐらいで中三の時の担任にも問題ないと言われた。

電車に乗り次の駅に到着するまでの間、俺はカバンから本を取り出した。本と言っても読んでいるのはライトノベルだが。自分で言うのもなんだが俺はオタクである。そこまでひどくはないがアニメなどをよく知らない奴からすれば俺は立派なオタクと言われるだらう。電車を降りて家まで歩きながらも俺は上を向いた。

俺はこんな日常が嫌いなわけではない。親に捨てられたとか、親が死んだとかがあるわけでもない。親は共働きで家にいないことも多いが特に不満はない。俺はきつと十分に幸せなのだろう。

だけど俺はこんな日常がつまらない。

いつそのこと空から美少女降ってくるとか、異世界に送り込まれるとかそんなことが起きないだろうか。

そんなことを考えても現実はその甘くない。いくら空を見上げていたところで女の子は降ってこないし、異世界に送り込まれることもないだろう。もし仮に空から女の子が降ってきたでしょう。その女の子はそのまま地面にぶつかり見るも無残なことになるし、異世界だって本当にあるとは思えない。

いつの間にか歩かず突っ立てることに気が付いた俺は再び歩き始めようとしたところで、ふと誰に見られている気がした。

俺もついに頭がおかしくなったかな。

なんてことを思いつつあたりを見回していると遠くに一人の女の子と目があつた気がした。

女の子すぐに目をそらしどこかに歩いて行った。

何だったんだ？

考えてもよくわからないから俺は

「まあ、いつか」

と考えるのをやめて家に帰ることにした。

プロローグ（後書き）

皆様どうだったでしょうか？まだ始まったばかりなので何とも言えないとは思いますが、この続きも読んでくださると嬉しいです。応援よろしく願います。

感想やアドバイスなどもお待ちしております。

第一話 「つまんねーの…」

翌日、朝のHRで

「実は今日うちのクラスに転校生が来ています」

と言う担任の言葉にうちのクラス二年二組はものすごい盛り上がりを見せていた。

「先生！男子ですか？女子ですか？」

「どんな子ですか？」

「早く教室に呼んでください」

はつきり言ってもものすごくうるさい。

もう少し落ち着けないものだろうか？

とか思うものの正直なところ俺もその転校生がどんな奴なのか気になってた。

「静かにしないと転校生が入ってこれないだろう！」

とクラスのまとめ役である佐藤何とかが周りを注意した。

下の名前は知らないがうちのクラスに佐藤は一人だけなので特に問題はないだろう。

一番最初に騒ぎ出したのはお前だけだな…

佐藤は何かあるたびに騒ぎ出し、周りを煽って最終的に自分でその場をおさめる。

「そういうお前だつて騒いでたじゃんかー」

こいつは確か……だめだ思い出せない。

とりあえず山田（仮）としておこう。

山田（仮）は佐藤とよくつるんでいる奴…だった気がする。

山田（仮）のことは置いとくとして、俺もこいつのいうことには賛成だ。

お前が騒いだりしなきゃいいだろうに。

そう思うがおそらくそれは無理だろう。

佐藤とは一年の時も同じクラスだった。ちゃんと話したことはなか

ったがいつもこんな感じで目立っていたので何となく覚えている。一年の時佐藤はよく教師に「お前が静かにしていればいいのだが」とか「あまり周りを煽ったりするな」などと言われていたが、二年になってからはそういうのもなくなった。おそらく教師も諦めたのだろう。うるさくなり過ぎたらちゃんと注意もするので教師からしたら悪い奴じゃないが、少し厄介な生徒と言ったところだろうか。「はいはい。今から転校生を教室に呼ぶから静かにしてね」担任がいうと同時にクラスが静かになる。最初から静かにしていればいいものを。「じゃあ、教室に入ってきてー」

ガラッ

教室のドアが開きそこから入ってきたのは長くてきれいな黒髪をした女子。瞳はきれいなオッドアイ。なわけがなく普通に黒い瞳だった。身長は男からすれば低いほうでまあ女子の平均ぐらいだろう。はつきり言って可愛かった。二次元のキャラと比べれば普通な気はするが、クラスの女子の中では一番と言ってもいいかもしれない。まあ好みは人それぞれなので絶対にクラスで一番かどうかはわからないが。

「長塚有希ながつかゆきです。家庭の事情でこちらに来ました。これからよろしくお願いします」

長塚有希は人懐っこい笑顔でそう言った。おそらく今の笑顔でクラスの男子の何人かは長塚有希に惚れたことだろう。

チラッ

一瞬長塚と目があった。

たぶん教室全体を眺めてもしてたまたま俺と目があったのだろう。

まあ長塚は俺のことなんか気にもとめてないはずだ。

「じゃあ長塚さんはあそこの席に座ってね」

「はい！」

長塚の席は廊下側の一番後ろとなった。

ちなみ俺は前から三番目廊下から四番目だ。

ほとんど真ん中ではあるがしょうがない。

今は五月の下旬だからあと一か月ぐらいで席替えがあるだろう。

それまでの我慢だと自分に言い聞かす。

「HRはこれで終わりにするからあとは質問タイムね」

「おお！先生わかつてる」

佐藤も転校生が来たことでテンションがものすごく高い。

「じゃあさっそく質問！どこから来たの？」

「趣味は？」

「前の学校ってどんな感じのどこ？」

さすがは転校生人気者だな。

クラスのほとんどの奴らが長塚の席集まっている。

俺は自分の席からその様子を眺めている。

俺以外にも席から動かずに長塚のほうを見ている奴らはいる。

そういう奴らはおそらくそこまで転校生に興味がないか、自分もそ

の輪に入るのが恥かしいのか。

その辺のことはそういつら本人に聞かなきゃわからないが

まあ別に特にすごい理由があるわけではないだろう。

ちなみに俺はただ聞きに行くのが面倒なだけだ。

俺だって転校生がどんな奴かは気になる。

でも何か月かしたら普通にただのクラスメートになるわけでどんな

奴なのかは見てればわかるはずだし、別に何か俺に影響を及ぼすわ

けでもない。

だから俺は質問攻めになってる長塚の観察をやめて、いつも通り力バンからラノベを取出し一時間目の授業が始まるまでの暇つぶしを始めた。

キンコーンカーンコーン

四時間目が終わり昼休み。

俺はすぐさま購買へ向かう。

購買で焼きそばパンとコロツケパンを買うと俺は急いで屋上に向かった。

本来屋上は生徒が勝手に入らないよう鍵がかかっており生徒は誰も屋上には入れないのだが、俺はちょっとした理由で屋上の鍵を持っている。

そのため昼休みはいつも一人で屋上に来て昼飯を食べる。

このことは俺以外の誰も知らない。

だから屋上はいつも俺の貸切というわけだ。

だが俺は昼休みにしか屋上に行かない。

休み時間や放課後は時々教師が屋上にやってくるのだ。

時々と言ってもそんな頻繁に来るわけではないのだが

放課後に一度そんなことがあり本気でばれるかと思った。

昼休みは教師も色々とやらなくてはいけないことがあるのか屋上に来ることは決してない。

だから俺はいつも昼休みは屋上で一人のんびりと昼飯を食っている。昼飯を食った後は時間ぎりぎりまで屋上で過ごし五時間目が始まる一分前には教室に戻るようになっている。

ふと今日うちのクラスに転校してきた長塚有希のことを思い出す。実は異世界から来たとか、超能力を隠し持っていたりしないかなあ。なんて思ってみてもやはりそんなことあるはずもない。

「つまんねーの……」

思わずつぶやくがどうしたところで何も変わらない。
それを理解しているからこそ余計に嫌になる。

キンコーンカーンコーン

予鈴が鳴った。

そろそろ戻るか。

俺は一度伸びをしてから教室に戻った。

結局その日は特に何もなかった。

普段と同じとしか言えない。

転校初日だからというのもあり長塚の周りには結構な人が集まっ
てはいたが、そのうち長塚にもの仲のいい奴とかができて結局は普
段通りになるはずだ。

翌日、今俺は凄く戸惑っている。

何故なら

「昨日は疲れたよ。みんなたくさん質問してくるから」

今俺の目の前には昨日は転校してきた長塚有希が笑顔で俺に話しか
けてきている。

何故こうなった!?

と叫びたいくらいである。

ちなみにどうしてこんな状況になったのかというと

俺は基本早めに学校に来ている。

だからクラスではいつも一番に学校についている。
今日もそうだと思っていたのだが

ガラッ

「あ、おはよう！」

教室に長塚有希がいた

バンッ

思わず思いっきりドアを閉めてしまった。

てか長塚学校来るの早すぎじゃねえの!?

いや俺がいうのもなんだけどさ

早すぎじゃねえの!?

よしいったん落ち着こう。

俺みたいなのがいるんだからほかにこの時間に来る奴がいてもおかしくはない。

まあてつきり俺が一番だと思ってたのにほかの奴がいたんだから驚いたのはしょうがないと思う。

とにかく教室に入ろう

ガラッ

「おはよう！」

「お、おはよ」

クラスメートにあいさつすんのって高校入ってこれが初めての気がする。

いつもは教室に一番乗りしたらあとはずっとラノベ読んでたからなあ。

「ところでなんで今一回ドア閉めたの？」

「あ、ああ。まさかここ時間帯に誰かが来るとは思ってたから驚いて」

「あはは。そうだよー私もこんなに早く来るつもりじゃなかったんだけど…」

「なら何でこんなに早く？」

早く会話を終わらせたいのだがこれだけは聞いておきたかった。

「時間見間違えちゃって大急ぎで来たらこんな時間に」

長塚は「あはは」と恥かしそうに笑っている。

「そうなんだ。」

時間を見間違えたって……でもまあそれなら明日からはまたいつも通りか。

問題も解決したしさつさとラノベでも読むかな。

なんて思いながら自分の席に向かおうとすると

「君はいつもこんな時間に来てるの？」

話しかけてきやがった！？

「まあね……」

俺はそっけなく返した。

「そうなんだ。でも毎日こんなに早く来て何してるの？…あっ！

もしかして部活とか？」

まだ話しかけてくるのか。

俺は話しかけられたらちゃんと話し返すことにしてるので

「俺は部活には入ってない。帰宅部」

「そっか。ならいつも何してるの？」

「…本読んでる」

ホントいつまで話しかけてくる気だ？

「昨日もずっと休み時間本読んでたよね？」

「なんで知ってんの？」

「休み時間のたびに読んでるんだもん。そりゃ気付くよ」

「それもそっか」

「それで、何読んでるの？」

「これ」

俺はカバンからラノベを取り出して一番最初のページを開いて見せる。

クラスメートにも何度が同じようなことを聞かれることがあった。

最初の頃は口で題名を言っていたのだが読んでいるのはラノベなので「え？何それ？」みたいな反応をされることが多かった。なので最近が一番最初のページを見せることにしている。すると「へえ」

と微妙な反応をされることも多いが、俺は気にせずに題名を見せたらすぐ読書に戻るようになっている。中には「宮野もこういうの好きなのか！？」と食いついてくる奴もいたが俺は「まあ」とか「それなりに」などそっけなく返して会話を終わらせてしまうので会話が続きそのまますクラスメートが席に戻っていく。

「へえ、君もライトノベルとか読むんだ」

「も？」

「うん。前の学校の友達の影響で私もそれなりに読むんだ。意外だった？」

「うんまあ」

正直驚いた女子でもオタクとかはいるけど長塚はそういうのまったく興味がないと思っていた。

「私がこういうの読んだら変かなあ？」

「別にいいんじゃないの。人の趣味とかは人それぞれだし」

「そっか、そうだね」

今度こそこれで会話は終わったな。
つてことでラノベでも読みますか。

「そっいえば…」

まだ何かあるのか……

しかも俺の前の席に俺の方を向いて座ってきやがった。

「名前教えてほしいんだけど。」

そつえば、俺まだこいつに名前教えてなかったな……

「宮野和也」

すると長塚は

「これからよろしくね！ 和也君！」

と笑顔で俺に言ってきた。

……てかいきなり名前かよ。

そんなんで三十分は長塚と話している。

「ねえ聞いている？」

「ん？ああ聞いている聞いてる」

学校の生徒は八時三十分には学校に着いて席に座らなければならない。
い。

そして俺はいつも七時三十分には学校に来ている。

つまり俺は一時間ほど早く学校に来ているのだ。

部活の朝練がある奴らはこの時間帯に学校に来ているがそれ以外の
連中は普通はいない。

朝練のある奴らは当たり前だが部活の練習に出ているため教室には
いない。

つまり俺は三十分ほど前からずっと長塚と二人っきりで話をしてい
たわけだが、もうすぐその必要もなくなる。

八時になると何人かの生徒がちよくちよくとだが登校してくる。

別に長塚を嫌っているわけではないが、三十分も誰か、しかも女子
と話すのはなんていうか色々と疲れる。

学校で俺は基本的に一人なのでこうも長時間（と言っても三十
分だが）話するのに慣れていない。

中学校の時はそれなりに仲のいい奴が実はいたりはするがそいつは男で女子とこれだけ話をするのは初めてだったりする。

とにかく今はこの二人っきりの状況をどうにかできればいい。早く誰か来てくれ」という願いが叶ったのか

ガラッ

来たっ！！

「おはよう！」

「おはよう。長塚さん来るの早いんだね」
俺を救ってくれたのは吉田だったか吉野だったか…たぶん吉田だったと思う。

控えめな性格だが人当たりが良く友達も多い子だ。

「吉田さんだったよね？」

「うん。私の名前覚えてくれてたんだ？」

良かった…名前あつてた。

「昨日は色々ありがとう。助かった」

「ううん。私はそんなお礼を言われるようなことしてないよ」

どうやら二人は昨日の何やらあったようでそれなりに仲が良さそうだった。

「あ、そうだ。昨日のことなんだけど…」

とそのまま長塚は席を立ちあがり、吉田の方に行ってそのまま今度は吉田と話し始めた。

やっと解放された。

ありがとう吉田！

声に出さず心の中で感謝の言葉を吉田に送った。

もう今日は疲れた。

まだ授業すら受けてないのに俺はとてつもない疲労感を感じた。もう今日みたいなことはこりこりだ。

第二話 「……ごめんちよつと病院行ってくる」

昨日の朝教室で長塚と遭遇した俺はHPを0寸前まで追い詰められたところ、吉田のおかげでその危機的状況を抜けることができた。その日は頭の中で吉田のことを神と崇めたりもした。

朝のことがあつてその日の授業はとても体力を消費した。

この時点で俺は色々と限界に達している気がしなくてもないが、この日は朝のこと以外は何事もなく無事に過ごすことができたのでまあ良ししよう。

問題は今だ。

「おはよう!」

何故また長塚がこの時間帯に教室にいるんだ?

昨日は確か長塚が時間を見間違えたからこの時間に来ていたのとことだ

「おはよ」

じゃあ何で今日もこの時間に長塚がいるんだ?

あれ?

これはつまりまた吉田様…じゃない吉田が来るまで話さなきゃいけないのか?

おかしいなわけがわからない。

あれ?あれ?

やばいこのままだと自分を見失う気がする。

そうなると精神科に行くことになるな。

できたらそれは避けたい。

よし一旦落ち着こう一度深呼吸でもして

「ヒッヒッフー、ヒッヒッフー」

「どうしたの和也君? いきなりラマーズ法なんかしだして?」

「……ごめんちよつと病院行ってくる」

精神科に行こう。

今ならまだ間に合うはず

「えっ？ 病院ってまさか…産婦人科？」

「ちげえよ！」

「違うの？」

「だから違うって！ ってか何故に産婦人科！？」

「だっていきなりラマーズ法なんかするし」

「あ、ああ…」

そりゃそうか、いきなりラマーズ法なんかしだして病院に行くなんて言ったら…

「おかしいだろ！？ 俺男だから！ 子供なんて産めないから！」

「とか言いつつも実は和也君女の子だった…」

「しないから！ 俺は真正銘男だから！」

何で俺朝っぱらからこんなこと叫んでるんだろっ…

「ふふ、あははははは！」

「ど、どうした？」

いきなり笑い出すもんだから驚いた。

いや長塚といると終始驚いてる気がする。

「いやだって、ふふ、あはははは！」

長塚は机を叩きながら大笑いしている。

やばい長塚が壊れた。

さすがに壊れた奴を見捨てる気にはならないので

「大丈夫か長塚？ 一緒に精神科行くか？」

「い、一緒につて和也君も？」

笑うのを我慢しているのか肩をぴくぴくさせながら「ふ、ふふ。」

と笑いを漏らしている。

はつきり言ってもものすごく不気味だ。

「最初に俺病院行ってくて言っただろ」

「あれって冗談じゃないの？」

「いや冗談抜きでだけど」

最初はおかしくなりつつあった俺が手遅れになる前にどうにかして

もらおうと思っていたのだが、今はこの壊れてしまった長塚を治してもらうのが先だろう。

「も、もう無理。あはははは！」

長塚はもう修復不可能な気がする。

手遅れか…

それからしばらく経ってようやく長塚の笑いが収まった。

てかあんなに笑い続けるような奴初めて見たな。

「はあはあ、ふ〜」

「えつと大丈夫か？」

これがきっかけで長塚がおかしくなっていたりしないといいのだが「うん。もう大丈夫」

良かった特に異常は見当たらなない。

ただでさえ長塚と関わるととてもなく体力を消費するのに壊れた長塚と関わったら自分が自分でいられるかわかったもんじゃない。

「和也君って面白いね」

「は？」

何で俺が面白いと言われなきゃいけないんだ？

「俺なんかした？」

「だっていきなりラマーズ法なんかしたり、俺は正真正銘男だなんて言い出したり」

「それは長塚が俺のこと実は女とか言うからだろ」

「ラマーズ法については…まあ置いておこう」

「普段からそういう風にしてればいいのに」

「普段からって長塚はまだ転校してきて三日目だろう」

「そうだけど和也君っていつもあんな感じなんでしょう？」

あんな感じってどんな感じと言おうとも思ったが長塚の言いたいことは何となく分かるので、

「休み時間に一人でラノベ読んで何が悪い、話しかけられたらちゃんと話すようにしてるだろう」

「そうなんだけど。うーんとね」

長塚は何か言いたいようだがもうタイムアップだ。
もうすぐ奴が来る。

「えーと、だから和也君は…」

ガラッ

「おはよー」

やってきたのは吉田だ。

ナイスだ吉田！さすがは我らが神吉田様だ。

「あ、おはよう真理ちゃん。」

真理って誰だ？

吉田の名前か？

まあ別になんだっていいや。

もう疲れた今日はもう時間が来るまで寝ることにしよう。

気が付けば昼休みだがはつきり言って今までの記憶がさっぱりない。
だが寝ていたというわけでもないらしい。

何故なら授業を受けた記憶はないのにノートはしっかりと取ってあるのだ。しかもこれは俺の字だ。

まあ特に気にすることではない。

どうせ授業中に語ることなど何もなし
とにかくさっさと昼飯を買いに行くかな。
なんてことを考えていると。

「宮野、ちよつとこの資料運ぶの手伝ってほしいんだが」

俺を呼んだのは国語教師の田中先生。

確か三十代の独身男。

俺が知っている情報はこれくらいだ。

ほかの教師のこともよくは知らない。

さらにここだけの話俺は担任の名前を知らない。

いつも担任のことを頭の中では担任と呼んでいるし、声に出して呼ぶときは先生と呼んでいるから名前を知る必要もない。

「宮野？おゝい宮野？」

うちの学校には教師の情報なんでも知っている生徒がいるという噂がある。

その噂には情報を使って教師を脅しているとか、教師だけでなく全校生徒の情報も持っているなど色々ある。

さらにはその情報売っているなんて噂もあり一部では情報屋と呼ばれている。

この噂のどこまでが本当なのか知りたいところではあるがその情報屋を見つけることは無理だろうと俺は諦めている。

「宮野？みゝやゝのゝ」

なんかうるさい奴がいるな

なんなんだまったく

「おい宮野、田中先生が呼んでるぞ。」

「え？ ああはい。なんですか？」

俺はクラスメイトに言われてようやく気が付いた。
少しボーっとしてたようだ。

「この資料を運ぶの手伝ってほしいんだが」

「はい。わかりました」

できることなら「やなことだ。この独身男！」とか言ってみたいがそんなことをしたところで怒られるのが落ちなので心の中で叫びながらも田中先生の手伝いをする。

それ以前に俺は国語係なのでこの教師の手伝いを断るわけにはいかない。

本当なら何の係りにもなりたくなかったが、何かしらの係りもしくは委員会はやらなくてはならないのしょうがない。

「助かった。ありがとうな宮野」

資料を職員室に運び終えた俺はさっさと購買に行こうとしたのだが、
「あ、宮野君ちようどよかった」

俺の前に担任が現れた。

「このプリントを長塚さんに渡してほしいの。私今ちょっと手が離せなくて」

何でこう次から次へと

これじゃあ昼飯食う時間が無くなるんだが

「お願い渡しといてくれる？」

「はい。わかりました」

何故か断れない俺。

「じゃあお願いね」

そう言って担任は去って行った。

あれ？ あの人どこに行っただんだ？

今うちの担任が職員室の窓から出て行った気がするんだが気のせいだろうか？

でもまあ今はそんなことよりもさっさとこのプリントを長塚に渡しにいかないと本気で昼飯を食う時間が無くなる。

俺は教室に戻るや否やすぐに長塚を探したのだが、

「いない」

どうやら教室にはいないようだ。

しょうがないから学食の方にも行くか。

俺はそう思って学食にも行ったのだが、

「いない」

ほかにも購買や中庭などにも行ったのだが、

「いない」

ここは一旦教室に戻った方がいいかもしれない。

俺は教室に向かったのだがその途中

「あ、長塚」

長塚発見。

「ん？ 和也君どうかしたの？」

「このプリント渡すよう言われて」

俺は担任に渡されたプリントを長塚に手渡す。

「ありがとう。わざわざ私のこと探してくれたの？」

「そうだけど」

「教室で私の机の上にも置いといてくれればよかったのに」

「……………」

「？ 和也君？」

「……………」

「おい」

その手があった！？

うわ最悪俺ってバカだ。

何で気が付かなかった俺！

「和也君？」

「ああ、なんでもない」

すっごいテンション下がってきた。

元からテンション低い方だけど

めっちゃテンション下がってきた。

「もしかして…気が付かないですっと私のこと探してたの？」

「！？」

「ふゝん、そっか」

「な、なんだよ」

「べつつにー、ふふふ」

「言いたいことがあるならはっきりと」

ぐう

「……………」

「和也君お昼食べてないの？」

すっかり忘れてた。

途中から「意地でも見つけてやる!」とか思つて昼飯のこと忘れてた。

「いいんだよ。昼飯食う前のちよつとした運動つてやつだから」

なんか色々と無理矢理な言い訳な気がする

「でも…」

「だからいいんだつて。今から食うから」

「そうじゃなくて時間…」

キンコーンカーンコーン

「…もうないよ」

「今すぐ食えばまだ間に合う」

「でも和也君お昼ご飯は？」

よく考えてみたらまだ昼飯買つてもない。

「……………」

「ご、ごめんね私のせいで」

「別に長塚のせいではないだろ」

もとはと言えば担任…いや田中が悪いんだ!

そうだあの独身男が俺に資料なんか運ぶのを手伝わせたのが悪いんだ!

あいつに食べ物の恨みは恐ろしいんだつてことを教えてやる。

「ふ、ふふ、ふふふふふ」

「か、和也君? どうしたのなんか怖いよ?」

「大丈夫だ。悪いのは全て田中なんだから」

「田中?」

「そう田中だ。あの独身国語教師だ」

「田中先生がどうかしたの?」

「いやなに、ちよつとあいつに仕返しをするだけさ」

「何する気?」

「まずはあいつの靴に画鋏を入れてやる。そのあとはさりげなく水やゴミをあいつに…ふふふふ」

「和也君！ 落ち着いてそんな地味な嫌がらせはやめようよ」

「地味？ ならもつと派手にするか」

「もつとだめだよ！？ ほらいつもの和也君に戻って」

「安心しろ。俺は普段通りだ。ちよつとテンションが高いだけで至って普通だ」

「ほら元に戻って。アンパンあげるから」

アンパンだと…

「…何で長塚アンパン持ってたの？」

「お昼に食べようと思ってたんだけど食べきれなくて」

「貰っていいの？」

「いいよ。はい」

助かったな田中今回は長塚のアンパンに免じて許してやる。

「ありがと。いくら？」

さすがにただで貰う気にはならない。

「お金はいいよ」

「でも…」

「いいってば。私は先に教室に戻るから和也君も早くアンパン食べて教室に戻って来なよ」

長塚は走って行ってしまった。

長塚よ…廊下は走るな。

しかし長塚には借りができてしまった。

長塚はそんなこと気にしてはないだろうがそのうち何らかの形で借り返さないとなあ。

アンパンを食べながら長塚にどうやって借りを返すか悩んでいると、
「ん？」

画鋏が一つ転がっていた。

「……………」

…田中の靴に入れといてやるか。

第三話 「お前バカか？」

長塚が転校して来てから二週間ほどが経った。

長塚もクラスに馴染んで特にこれといって問題はない。

クラスの奴らも長塚を受け入れている様子だ。

そういう俺も長塚の存在に慣れつつある。

「おはよう！」

「おはよ」

今では朝での挨拶も普通にできる。

まあ挨拶なんてできない方がおかしいんだけど…

「今日も早いね」

「お前に言われたくねえよ」

こんな軽口も言えるぜ！

「ほらほら和也君、今日こそは私とお話ししよう」

「は？ 話したら毎朝してる気がするんだけど」

長塚の奴この歳でばけたか

「和也君いつもああとか、うんとか、そうだねとか相槌ばかりじゃない」

「そんなこと…」

ないとも言い切れない自分がいる。

「だからたまには和也君から何か話題だしてよ」

「そんなこと言われてもな…」

俺は基本聞き手だし、何かを話すにしても何かしら話題がないと何を話せばいいかよくわからない。

だから自分から話題をだせと言われてもどうすればいいかわからない。

ホントに俺って…

「ほれほれ私に聞きたいこととかでもいいからさ」

「ん…」

聞きたいことか…そうだな。

「そういやずっと前から気になってたことがあるんだ」

「何々？ 何でも聞いて」

「すっかり聞くの忘れてたんだけどさ、何で長塚こんなに早く学校に来てるんだ？」

「え？ 聞きたいことってそれ？」

「そうだよ。確か最初は時間見間違えたんだよな？」

「そうだけど」

「それはいいんだよ。誰だってミスすることはある。でもそれから毎日この時間に来るのがわからん。ありえないとは思うが毎日時間を見間違えたりしてるのか？」

「だとしたら長塚は悪い意味ですごいと思う。」

「いくらなんでもそれはないよ」

「なら何でこんな時間に来るんだよ？」

「そんなの決まってるよ！」

「？」

「和也君とお話したいからに決まってるでしょ！」

「……………」

何言ってるんだこいつ

「その何言ってるんだこいつっていう目やめてくれない？」

「お前バカか？」

「む。失礼なこと言わないでよ。私それなりに成績いいんだよ」

「いやそういう意味じゃなくて」

「大体そんなにおかしなことかな？」

「おかしいにもほどがある。何で俺？ 吉田とかならまだわかるが」
「真理ちゃんとお話するのも好きだけど、和也君とお話するのも楽しいよ」

「本当によくわかんない奴だな。俺なんかと話して何が楽しいんだか」

「そうかな？ 和也君って面白いじゃん」

「俺からしたら長塚の方が断然面白いわ」

「そ、そうかな。なんか照れるな。えへへ」

「何で照れるんだよ！ 面白いつて言われて照れる奴初めて見たわ！ 大体褒めてすらないからな」

長塚と話すとはント疲れる。

「ほらほら他にも何か質問ないの？」

「ない」

俺が聞きたかったのはこれだけだからな。

「ええーもつと私になんか聞いてよ。なんでも答えるよ」

「ないもんはない」

「ちえー、いいもんなら私が和也君に質問するもん」

「俺に？」

また面倒なことになってきたな。

「そつちだけ質問しといて私の聞きたいことは無視なんてずるいこととはしないよね」

こいつ最初からこれが目的か。
しょうがない。

「何が聞きたい？ 俺の答えられる範囲でなら答えてやるから」

「え？ ホントにいいの？」

なんなんだこいつ自分から聞いておいて。

「聞きたいことがないなら無理に聞くことはないだろ」

「待つて待つて少しだけ考えさせて」

「言つておくけど質問は一回だけな」

「何で？」

「俺はお前に一回しか質問してないんだから長塚も俺に聞けることは一回だ」

「和也君ずるい！」

「お前にだけは言われたくないわ！」

はあ早く吉田来てくれないかな。

「ならとりあえずとつておくよ」

「は？」

何を言ってるんだ長塚は？

「だから今は質問しない。そのうち質問するからその時に和也君、ちゃんと答えてね」

「やつぱりお前の方がずるいわ！！」

今現在授業中。

科目は国語、教師は田中先生。

今思えば俺も地味に嫌なことをやってしまったと反省はしている。ついカツとなつてやってしまった。

だが後悔はしていない。

あの時俺がやったことは正しかったと少しばかり思っていたりする。田中先生の靴に入れた画鋏がどうなったかは知らない。

てかもう興味ない。

今俺は反省の意味を込めて今回は少し真面目に授業を受けている。

「つまりこの作者の伝えたいことは」

今回は真面目にしているが次回からはいつも通りにしよう
はつきり言つて疲れるからな

「次にこの…」

キンコーンカーンコーン

「つと今日はここまで」

ざまあ。チャイムに授業邪魔されてやんの。

「宮野あとでノートを集めて俺のところに持ってきてくれ」
罰が当たった。

というか何であとでなんだよ。

今でいいじゃん。

今ノート集めた方が絶対にいいじゃん！

「はい号令」

「起立、礼！」

嫌がらせか！嫌がらせなのか！？

やはり田中を許すわけにはいけないようだ。

「はあめんどくさ……」

ていうか重い！

このノートたち重い！

正直一人でこれを職員室まで持つていくのはきついかもしれん。

田中めこれをわかつていてわざと俺に。

俺の中でどんどん田中への恨みが膨れ上がっていく気がする。

「宮野君大丈夫？」

「え？ ああまあ」

俺に声をかけてきたのは吉田だった。

一時期俺の中で神として崇められていたことのある吉田様が一体俺に何の用だ？

てか用があるなら早くしてほしい腕がきつい。

「ノート運ぶの手伝いましょうか？」

「は？」

いきなり手伝うとか言うもんだから驚いた。

でもよく考えてみると吉田は人が困っていたりするとよく声をかけたりすることが多いので今回もそんな感じだろう。

「いやいいよ。大丈夫問題ない」

「いいからノート半分貸してください」

吉田は俺からほとんど無理矢理な形でノートの半分を持ってくれた。

「ほら職員室に行きましょう」

「あ、ああ」

吉田の言つとおりさつさと行くことにしよう。

気まずい。

さつきからずっと無言だ。

こんなのとならやっぱ一人で運んだ方が気が楽だったと思う。

「あの…」

「何？」

吉田の方から俺に話しかけてきた。

「えっと、その…」

「？」

何か言おうとしたが何を話せばいいかわからない様子。

どうやら吉田もこの気まずい空気が嫌らしい。

「あ、そうだ。宮野君ってさ有希ちゃんと仲いいですね」

「えっとさ、有希って誰？」

おそらくはクラスの誰かだろうが、残念ながら俺はクラスメートの苗字ならともかく名前はわからない。

「長塚有希ちゃんのこと。いつも朝二人で喋ってるじゃないですかどうやら有希とは長塚のことらしい。」

「朝は二人しかいないから喋ってるだけで別に仲がいいわけじゃないと思うよ」

「嘘。宮野君ってあんまりクラスの子と話したりしないじゃないですか。普段なら二人きりでも気にせず一人で本読んでるのに有希ちゃんとはよく話してるでしょ」

それは長塚が俺にかまってくるだけです。

そんなことを言ったところで吉田が信じると思えない。

「それに有希ちゃんと話してるとよく宮野君の名前が有希ちゃんの口から出てきますよ」

待て待て待てあいつは一体何を話してるんだ？

変なことを吹き込んだりしてなきゃいいが

「和也君って本当は面白いんだよ。とかよく聞きます」

あいつはホントに何を…

「それに有希ちゃん転校してきたばかりなのに宮野君のこと名前で呼んでるじゃないですか」

「それなら吉田だって名前で呼ばれてるだろ」

「そりゃ私は女の子ですから、男子で名前呼ばれてるの宮野君だけだと思います」

「どうだかな」

長塚って何考えてるかよくわからないんだよな。

「あ、着きましたよ」

ガラッ

「失礼します」

田中はどこだ？

「田中先生ノート持ってきました」

どうやら吉田が田中を見つけてくれたらしい。

「おう、宮野お疲れ。吉田は宮野の手伝いか？ 偉いな」

「いえ、私が勝手に手伝っただけですし」

「じゃあ先生失礼します」

さっさと教室に戻るかな。

「吉田手伝ってくれてありがとう」

教室に着いたので吉田にお礼を言っておく。

「どういたしまして」

「む、和也君。真理ちゃんにデレデレしてない？」

「デレデレって表現この場では使わんだろうとお礼言っただけだし。てかいきなり現れるな。心臓に悪い」

ここで長塚の登場。

気配もなく表れたので少しばかり驚いた。

「そんな照れなくてもいいのに」

「ちよつと待った。なんか会話になってないぞ」

「ごまかさないで！」

「何をだよ！ ていうか会話になってないって言うてるだろ」

「……………」

なんか吉田がポカンとしてる気がする。

「ね！ だから言ったでしょ。和也君は面白って」

「ふふ。そうね」

はぁホント疲れた。

席に戻る。

「あれ？ 和也君どこ行くの？」

「どこって自分の席に戻るんだよ」

「もつと喋ろうよ」

「無理、疲れた」

「ちえーケチ」

「ケチで結構」

長塚と話すと体力がごっそりと持っていけるわ…

第四話 「見たらわかるだろ？ 先制攻撃だよ」

今日は日曜日、つまり休日だ

今現在俺は一人で街をぶらぶらしている。

俺の休日を過ごし方は日によって違う。

昼過ぎまで寝ていることもあれば早起きすることもある。

ひどい日には夕方まで寝ていることもある。

早起きをしたときは今みたいに一人で出かけたりすることが多い。
はつきり言ってしまうえば俺はいつも休日に暇を持て余している。

だから何か面白いことがないかと一人で街に来ているわけだ。

「なんかのどが渴いたな」

近くに自動販売機を見つけたので俺は財布をポケットから

「あり？」

財布がない。

掏られたとは思えない

そうなると…

「家か…」

俺は財布を家に忘れたらしい

最悪だな

こんな日はよくないことが起こる気がする

今日はもう帰った方がいいかもな

俺は帰ろうと来た道を戻ろうとしたとき

「いいじゃん俺らと遊ぼうぜ」

「なんか奢るからさ」

「ほら一緒に行こう」

ナンパをしている連中が目にとまった。

「迷惑なんで」

ナンパされてるのはどうやら長塚のようだ。

何で休みの日まで長塚の顔を見なきゃならんのだろう？

ちなみにナンパされているのが長塚だから気になったわけではない
俺が気になったのは

「そう言わずにさ」

「俺らと一緒に遊ぼうよ」

「ほら一緒に行こう」

ナンパをしている三人組だ

正確には三人組の髪型だが

「ねえ無視しないでさあ」

「ちよつとだけでいいから」

「ほら一緒に行こう」

上からアフロ、モヒカン、リーゼントというものすごい組み合わせ
なのだ

ところでさっきから気になっていたのだが

リーゼントの奴さっきから「ほら一緒に行こう」としか言っていない
のだがほかに言えることがないのだろうか？

「もうやめてください。しつこいですよ」

長塚もからまれて迷惑してるようだ

別に見なかったことにしてもいいんだけど

長塚には前に貰ったアンパンの借りがあるんだよな…

助けるべきだよなあ

となると問題はどうかやって長塚を助けよう？

彼氏の振りでもするか？

でもなあそんなことしたら……

「おい長塚」

「え？ 和也君」

「すいませんこいつ俺の彼女なんです」

「はあ冴えない顔しやがって失せろ」

「何？」

「てめえなんかお呼びじゃねえんだよ」

「言ってくれんじゃん、いかれた髪型しやがってそつちが失せる」
「ああん言ってくれんじゃねえか」
「ちよつくら痛い目みさせてやんよ」

……とかなって思いつきサンドバックにされるよなあ
一対一ならそれなりに自信はあるが二、三人を相手にしたら確実に負ける

とすると俺がすべきことは…

「ねえねえ、いいでしょ少しくらい」
「だからしつこいって……へ？」
「んん？ どうしたの？ 一緒にお茶してくれる気に ぐべらっ
！！」

俺がすべきことそれは
「な！？ てめえいきなり何しやが へぶちっ！！」
不意打ち

正々堂々と喧嘩して勝てないなら不意打ちで相手の数を減らす
モヒカンとリーゼントは倒した
残るはアフロ！

「か、和也君！？」
「よう長塚、こんなところで奇遇だな」
「奇遇だなじゃないよ！ 何してるの！？」
「見たらわかるだろ？ 先制攻撃だよ」
「いきなり攻撃しちやだめだよ！」
「よく聞けよ長塚。宮野家の家訓その一、やられる前に殺れ！」
「ホントにそんな家訓あるの！？」
「たった今俺が作った家訓です」
「いい度胸してんじゃねえか」
俺の目の前にはアフロ

他の二人が目を覚ます前にかたずけるか

「一つ聞きたいことがあるんだけど」

「ああん？」

「なんで三人そろってそんな愉快的な髪型してんの？」

「バカにしてんのかてめえ、超かつこいいだろが」

「どうやらこいつらは髪型どころか頭も愉快的な方たちのようだ

「ところでアフロ、後ろを見てみな」

「ん？」

「隙あり！」

俺は全力で蹴りをアフロの股間に放った

「おふう○？ %！」

我ながら恐ろしいことをやってしまった

「ほら行くぞ」

この隙に長塚の手を取ってこの場から離れよう

「はぁ疲れた」

「ありがとね和也君。助かつちゃった」

「これで貸し借りはなしな」

「え？ 何のこと？」

「前にアンパンくれただろ。これで借りは返したから」

「別にアンパンくらい」

「いいんだよ。これだ貸し借りはなしいいな？」

「うん。わかった」

疲れたけど借りは返せたし一件落着かな？

「でもやり過ぎじゃなかった？」

「何が？」

「あの人たちいきなり殴つちやたりして」

アフロたちのことか

「別にいいんだよ。ああいう連中にはあの方法が一番だ」

「でもどうせ助けてくれるんだったら彼氏の振りでもしてくれればよかったのに」

何故か少し残念そうに言う長塚

それも考えたんだけどな

「その場合俺はボコボコにされてたよ」

ああやだよ

「んじゃ俺帰るわ」

「帰っちゃうの？」

「特に目的があつてここに来てるわけでもないしな」

「なら私の買いい物に付き合つてよ」

「は？」

「特にやることもないんでしょ？ ならいいじゃない」

「そんなことは誰か友達にでも頼めよ」

「だから友達の和也君に頼んでるんじゃない」

「俺以外の奴に頼め」

「真理ちゃんやほかの子も今日はようがあるんだって」

「そりゃ残念だったな」

「ねえだめ？」

なんか長塚が上目使いで言ってきた。

これはあれか？

狙つてやってるのか？

不覚にも一瞬可愛いと思つてしまった。

「それに一人でいたらまたナンパされるかもだし」

長塚ははつきり言つて可愛い方だからありえなくはない。

「和也君がいてくれたら心強いなあ」

だんだんと追い詰められている気がするな

「それとも私と一緒にいるの嫌？」

今にも泣きだしそうな顔をしてそんなことを言われると正直断れない。

これはもう俺の負けだな

「わかったよ。少しだけお前の買い物に付き合えばいいんだろ」
「いいの？」

「いいよもう俺の負けだ」

「やった！　ならさっそく行こう」

そうして俺は長塚の買い物に付き合うことになった。

「んで、どこ行くんだ？」

「ん」とね、まずは服を見ようかなって思ってた

これはもしや荷物持ちとかさせられるのか？

いやまあ別にいいんだけどな

そんなこんなで俺は今長塚と一緒に服を見て回っているわけだが

「あ、この服可愛いかも」

長い！

よく女の子の買い物には時間がかかるなんていうが

ホントに長い

もう結構な時間服を見ている

「和也君この服私に似合うと思う？」

そういつて長塚は薄ピンクのカーディガンを俺に見せてきた。

「ん、まあ似合うと思う」

ていうか長塚なら何でも着こなす気がする。

そういえば

「今更だけど長塚の私服初めて見たな」

長塚はチェック柄のマキシ丈のワンピースに白のカーディガンを着

て、涼しさが感じられる格好だ。

「ホントに今更だね。それに私だって和也君の私服姿見るの初めてだよ」

俺はジーンズで黒のインナーにＴシャツを着ている。

ちなみにＴシャツは家にあったものを適当に選んで着た。

俺はあまり服装を気にしない。

変に目立つような服装だったり、あまりにもダサイ服装でなければ地味でも何でもいいと俺は思ってる。

「もうこんな時間だね。そろそろお昼にしようか」
気が付けばもう昼だった。

相当な時間服を見ていたことになる。

「お昼どうする？ ファミレスにでも行く？」

長塚が昼はどうするか聞いてきたが

「悪いが俺は昼飯はパスだ。どうしても食べたきゃ一人で行ってくれ」

「え？ どうして？」

そんなこと決まってる

「財布を家に忘れたからだ」

「じゃあ今お金持ってないの？」

「ああ。財布を忘れたことに気が付いて家に帰ろうとしたらナンパされてる長塚を見つけてな」

「そして今に至ると」

「そういうことだから俺は昼飯が食えないわけだ」

「そっか。ならそうだな…」

「どうかしたか？」

「なら私がお昼奢ってあげるよ」

それは魅力的な提案だが

「そうするとまた借りができるから遠慮する」

「私は借りとか気にしないからさ」

「俺が気にするんだよ」

「だったらお昼奢る代わりに午後私私の買い物に付き合っで。それでいいでしょ」

つまり今日一日長塚の買い物に付き合うことになるわけか…

正直なところ腹減ってるんだよな

「うゝん」

「ねえいいでしょ。好きなだけ奢ってあげるから」

「…わかった。それでいい」

空腹には勝てなかった

「ん、なら行こっ！」

俺は妙にご機嫌な長塚と昼飯を食うことにした。

その日は結局ホントに一日買い物に付き合わされた。

「今日はありがとね」

「俺も昼飯奢ってもらったからなお互い様だ」

今俺たちは家に帰っている途中なのだが

「ところで長塚の家ってこの辺なのか？」

「そうだよ」

俺の家もこの辺りなのだが意外と家が近くなのかもしれない。

「あ、私こっちだから」

「家まで送ってくか？」

「ううん大丈夫。私のうちもう近くだから」

「そうかじゃあまたな」

「うんまた明日」

俺は長塚と別れて家に向かう。

休日なのに休めた気がしない一日だったな。

でもなんだか少し楽しかったような気がしないでもない一日だった。

第五話「はあ、空が青いや」

休めた気がしない休日が終わる

週明けの月曜日

俺は今通学路を歩いている。

俺の周りに同じ学校の生徒はいない。

何故なら俺はいつも家を出る時間が早いから…

だったら良かったのだが、そうではなく今俺は絶賛遅刻中なのである。

起きて時間を見た時にはもう間に合わないと確信した。

なので俺は諦めていつもよりゆっくりと学校へ向かっている。

今学校は一時間目の途中だろう。

もう学校には着くので一時間目が終わる前までには間に合うと思う。

授業なんてどうでもいいのだがノートを書さないといけない。

先生の話はまともに聞かないくせにこういったことは真面目にやっている。

ノートなんて友達に見せてもらえばいいと思うだろうが

残念なことに俺にはノートを見せてくれるような友達などいない。

別に頼んだのにノートを見せてくれないとかそういう意味ではなく、気軽にノートなどの貸し借りのできるほど仲のいい友達がいらないという意味である。

まあそれはそれで残念な奴だとは思う。

だが俺が仲のいい奴を作らなかつた結果なので文句は言わない。

他の奴に悲しい奴とか言われても俺は悲しいなんて思わない。

俺は自分で決めてこういう生き方をしてるのだから。

不便だとは思ったりはするが…

実際にクラスの誰かに頼めばノートぐらい貸してはくれるだろうが俺はそうしない。

何故かわからないがそうしたくないのだ。

そんな理由で俺は今までのすべての授業のノートを自分の力だけで写している。

ラッキーなことに高校生になってからは熱が出るときはいつも休日だったので特に問題はなかった。

前に一度だけ金曜日の朝に微熱が出たことがあったのだが、次の日は休みなので無理をして学校に行ったことがある。

こんなことをしていたため、俺は去年一度も学校を休むことはなかった。

我ながらバカなことしてんなあ。

何度そう思ったことか。

気が付けばもう学校だった。

俺は靴を履き替え教室へ

ガラッ

「遅刻だぞ宮野」

言われなくてもわかってる。

教室に入ってきた俺に言ってきたのは地理の教師の原田先生だ。男なのだが噂では女装が趣味らしい。

ホントかどうかは知らないが。

「すみません。寝坊しました」

俺は自分の席に着いて授業の準備をする。

急いでノートを書さないと。

俺はノートを開いて黒板を…

「は？」

思わず声を上げてしまった。

「どうかしたか？ 宮野？」

「なんでもないです」

黒板にはぎっしりと字が書かれている。

そりゃもうぎっしりと。

黒板の隅から隅へと。

何で遅刻した今日に限ってこんなに書かれてるんだよ…

いつもはこんなに書かないくせに、

少ない日なんか黒板に三、四行ぐらいしか書かないくせに。
とにかく写さないと。

授業が終わるまで後十分。

原田先生はさらに文字を増やしていく。

「ここ消すぞー」

「あつ、少し待ってください」

やばい急がないと字が消されてしまう。

「いいか？」

「あ、はい。そこはもういいです」

正直間に合う気がしないが諦めるわけにはいかん

キンコンカーンコン

アウト！

間に合わなかった。

「今日はここまでだな」

「起立、礼！」

嫌まだだ。

まだ黒板の字は残ってる。

俺は諦めずに黒板の字を…

「日直めんどくさー」

日直に字を消された。

めんどくさいならやらなきゃいいじゃん！

結局黒板の字は消され、俺はノートを写すことはできなかった。

昼休み俺はいつも通り屋上で昼飯を

「はあ」

食べてはいなかった。

別にこんなことぐらい気にしなくてもいいとは思っが、
ここまで頑張ってきたのでなんか悔しい。

「はあ、空が青いや」

空を見て現実逃避する俺。

屋上にいるので上を見れば空が広がっている。

広大な空に比べればこんなことはちっぽけなこと。
なんて割り切れるはずもなく。

「あーくそっ」

いつそのことこのままぐれてしまおうか。
そんなことを考えていると

ガチャッ

「は？」

誰かが屋上に来たようだ。

つてやばい！

もし教師だったらなんて言い訳すりゃいいんだ！？

ホント今日は厄日だな。

もっいつそこから飛び降りてしまおうか…

「あ、和也君いた」

「……………」

長塚がやってきた。

どうやら今来たのは長塚だったらしい。

「……………」

「和也君どうかしたの？」

「いやもつさ…ここから飛び降りようかって」

「ええ！？　だ、だめだよ！　そんなことしちゃ」

「ふっ」

「なんで鼻で笑うの！？　大体なんで飛び降りようなんて」

「そりゃ俺が寝坊したせいで…」

遅刻してノートが…ノートが…！！

「え、そんなこと？」

「そんなことだと！」

「何でそんなに怒るの！？　一回遅刻した遅刻くらいで…」

「遅刻のことなんかどうでもいいわ！！」

「ええ！？　なら何で怒ってるのか余計わからないよ」

「くそつ何で俺が遅刻した日に限ってあんなに書いてることが多いんだよ…」

「ああ、今日の地理書くこと多かったよね」

「油断した。ノートを写すだけと思ってゆっくり来たのが間違いだった」

ダッシュで学校に来てればよかった。

「和也君ノート写すの間に合わなかったの？」

「そうだけど…」

「ならノート貸そうか？」

「うん？」

「だからノート貸してあげるよ」

「……………」

どうしよう…

やはりここは借りておくべきか…

でもよくよく考えてみると俺って長塚に助けてもらっこと多いよな。アンパン貰ったり、昼飯奢って貰ったり。

また借りを作ることになるんだよな。

「あ、もう誰かに借りてる？」

「いや、そうじゃないけど」

借りを作ったのなら返せばいいよな。

ここまで教師の言うことは全て聞き流しノートを写すことだけを頑張ってきたんだし、

借りれるもんは借りよう。

「ノート貸してもらうわ」

「わかった。後で教室で渡すから」

「ああ」

そっぴやなんか忘れてる気が…

「和也君って昼休みいつもここに来てるの？」

「そうだけど……ってなんで長塚がここに来てんだよ!？」

聞くのすっかり忘れてた。

「朝に和也君とお話できなかったから昼休みにしようと思ってたんだけど、よく考えてみると和也君って昼休みいつも教室にいないからこっそりと後をつけてきた」

ホントに油断してた。

いつもはもつと周りを気にしてたんだけど今日はノートのことですつきまで地味にへこんでたからなあ。

「屋上って鍵が掛かってて一般生徒は入れないはずだけど」

「俺は鍵を持ってるから問題なく来れる」

「何で和也君が屋上の鍵なんか持つてるの？」

「秘密」

「……………」

長塚がこっちを睨みつけてくる。

「ジーーーー」

「……………」

「ジーーーー」

「……………」

「ジーーーー」

「ジーーーーって口に出しながら睨みつけるのやめてくれるか」

「ジーーーー」

「だから…」

「ジーーーー」

「…わかった。教えてやるから」

「ホント!？」

何故だろう？

長塚には勝てない気がする。

「俺が屋上の鍵を持つてる理由だよな」

「うんうん」

「それは去年に俺が拾ったからだ」

「拾った？」

「そう拾った。去年の今頃にな廊下に落ちてたんだよ」

「それをそのまま自分の物にしちゃったの？」

「最初は誰かの家の鍵かとも思ってたんだけど、よく見たら学校のだったからな」

「だからって自分の物にするのはどうかと…」

「最初は大変だった。どこの部屋の鍵かわかんなくて休み時間になるたびに手当たり次第この鍵が合うとこさがして」

「そんなことずっとやってたの？」

「結構苦労はしたけどな。それで屋上の鍵だということが判明して今に至る」

「先生にばれたりしなかったの？」

「ばれそうになったことはあったけど何とかやり過ごした。それで昼休みに教師が来ることはないとわかってからは昼休みだけ来てる」

「だから和也君昼休みに教室にいないんだ」

「このこと知ってんの俺だけだからのんびりできんだよ」

「でも私も知っちゃたよ」

そう問題はそれだ。

「このこと誰にも言わないでもらえると助かるんだが…」

「それはいいんだけど…」

なんか嫌な予感がする。

「私も時々ここに来ていい？」

そんなことだろうと思ったださ。

「俺ここで一人で過ごす時間が好きだったりするんだけど」

「たまに来るだけだから。お願い！」

どうしたものか…

さつき作った借りをこれで返したことにすればいいか。

来るのはたまにって言ってるし

「いいぞ。たまになら」

「いいの？」

「いいって言っただろ」

「やった！」

ずいぶんと嬉しそうだな。

「あ、早く食べないと時間が無くなっちゃう」

「ん、そうだなさっさと食うか」

「うん！」

俺は袋からパンを取り出し、

長塚は弁当の蓋を開け

…ん？

「お前も一緒に食うのか？」

「え？ そうだけど」

長塚は「ほらっ」と俺に弁当を見せてきた。

長塚の弁当には卵焼きにウインナー、ほうれん草のおひたし、いん

げんのベーコン巻き。

ご飯にはふりかけがかかっている。

「へー美味しそうな弁当だな」

今更文句を言ったところで長塚は絶対にここで昼飯を食べるだろうから、

俺はもう何というか…諦めました。

「え、そう？ これ私が作っただけだ」
「へえそうなんだ」

長塚って料理もできんだな。

「よかつたら食べる？」

「ん？ いいのか？」

正直なところ食ってみたいと思う。

「うん。よかつたらだけど…」

「なら卵焼き貰っていいか？」

「うんいいよ。はい、あゝん」

長塚は箸で卵焼きを摘み俺の口元に運んできた。

「…何やってんだ？」

「え？ だからあゝん」

「いや自分で食べるから」

「えゝいいじゃん。ほら」

「いやだからいいって」

「ジーーーー」

「またそれが」

「ジーーーー」

「二度も同じ手には掛からないぞ」

「ジーーーー」

「まだやるか…」

「ジーーーー」

「……………」

きりがないので俺は長塚が諦めるまで無言で目を合わせる

「ジーーーー」

「……………」

「ジーーーー」

「……………」

「ジーーーー」

「……………」

「え、えつと」

長塚が頬を赤くしながら目をそらした。
勝った！

長塚に勝った！

「卵焼き貰うぞ」

俺は弁当箱から一つ卵焼きを摘み口に入れた。

「あつ」

「（もぐもぐ）」

「えつと、どうかな」

「（ゴクツ）ああ美味いぞ」

冗談抜きで美味かった。

「そ、そっかよかった。もっと食べる？」

「さすがにこれ以上食ったら長塚の分がなくなるだろ」

「別にそんなこと気にしなくていいのに」

「俺が気にすんだよ」

食べたくなかったと言えば嘘になるが。

「なら今度和也君の分のお弁当作ってきてあげようか？」

「……………」

とてつもなく魅力的な提案をしてきた。

長塚の弁当を食う前なら「いらん」と一蹴できただろうが

今の俺はもう一度食べたいと思ってしまっている。

「……………機会があつたら頼む」

「うん！」

頼んでしまった。

それほどまでに長塚の弁当は美味かった。

「なら今度一緒にお昼食べるときに作ってくるね！」

「あ、ああ。よろしく頼む」

悔しいことに早く長塚の弁当をもう一度食べたいと思ってしまった俺だった。

第六話「うん。ちょっと待とうか？」

長塚と弁当の約束をして数日が立った。

今日の朝に長塚から

「今日お弁当作ってきたから一緒に食べようねっ」

と言われたので俺は今屋上で長塚を待っているのだが…

「遅い」

長塚が中々来ない。

といつてもまだ昼休みになってから五分ほどしか経ってはいないのだが、

教室からここまで来るのにそんなに時間はかからないはずだ。

ガチャッ

「ごめん。待った？」

長塚がやつと来た。

「多少待った」

「む、そこは「俺も今来たばかりだから」とか言つところでしょ」

「いやだってホントのことだし」

「和也君ノリ悪いな。せつかくわざと遅れてきたのに」

「うん。ちょっと待とうか？」

なんか今聞き逃せない言葉があつたぞ？

「今わざとつて言つたか？」

「？」

「だから今わざと遅れてきたつて言つたよな？」

「言つたけどどうかした？」

「つまりお前はさっきの「ごめん待った？」のやり取りがしたくてわざと遅れてきたと」

「うん！」

こいつはホントにバカなんじゃないだろうか？

俺は思わず頭を抱えてしまった。

「それより早く食べよう。時間無くなっちゃうよ」

お前がもつと早く来ればとすぐに食ってただけだな。

そう思ったが口には出さなかった。

というか口に出す気にもなれなかった。

「はい。和也君のお弁当」

「おう。サンキュー」

弁当箱は二段になっており一段目の中身は豚肉の生姜焼き、ほうれん草のごま和え、卵焼き、ポテトサラダ、プチトマト。二段目にはご飯がある。

「んじゃ。いただきます」

俺はさっそく卵焼きを食べる。

長塚から事前に何かリクエストはあるかと聞かれていたので俺は卵焼きを頼んでいた。

「なあ長塚」

「何？」

「この卵焼きの作り方教えてくれない？」

「卵焼きの作り方？」

「そう。この卵焼き気にいったんだよね」

数日前に長塚の卵焼きを一口貰ってから何度か卵焼きを作ったのだがどうにもこの卵焼きを超えるものが作れないでいる。

「それって美味しいってこと？」

「それ以外にどういう意味があるんだよ？」

「そっか。ふふ」

「どうした？ ついに頭がおかしくなったか？」

「失礼なこと言わないでよ。そんなこと言うなら作り方教えてあげないからね」

「すみません。教えてください」

「ふふ。やーだよ」

「お前教えるつもりないだろ」

「ありやばれた？」

謝ったりしなきゃよかった…

「でもまた食べたいって言うてくれるなら私が作ってあげるからね？」

「…またお願いします」

長塚が作ってきたのを食べて独自で研究することにしよう。

「ところで和也君って料理できるんだね」

「まあな。両親共働きだからよく自分で晩御飯とか作る」

そのせいで最近家は親が居ても「最近仕事で疲れてるから代わりに作って」とか言われるようになったちゃったけど…

「俺は自力で料理できるようになったけど、長塚は親にでも教わったのか？」

「小さいころからお母さんのお手伝いしてて、色々と作り方とか教えてもらったんだ」

「いいよな。ちゃんと教えてくれる人がいて」

俺なんか昔母親に料理のコツを聞いたたら「包丁の使い方さえ気を付ければ後は気合で何とかなる！」とか言われるだけだった。

おかげで包丁で自分の指を切るなんてことはあまりしなかったが、ちゃんとした物を作るようになるまでに結構時間がかかった。

「一人だけでどうやって料理覚えたの？」

「料理の本を読みながらな」

過去に戻って昔の自分を褒めてやりたい。

この後も俺は母親のことを愚痴ったり、長塚と他愛もない話をしながら昼休みを過ごした。

俺は今、今日の晩御飯の献立を考えながら帰宅していた。

もう電車は降りて家に向かっているので少しすれば家に着くはずだ。今日も親は仕事で「遅くなるから晩御飯はよろしく!」とか言われたので自分で晩御飯を用意しなくてはならない。

材料はまだ残ってははずだから何を作るかは材料を見て決めるかな。そんなことを考えているうちに家に着いた。

「ただいま」

誰も居ないはずなので独り言感覚で呟いたら

「お帰り〜!」

と居間のから声が返ってきた。

「は?」

俺は慌てて居間に行くと

「どうしたのよ。そんなに慌てて?」

そこには俺の母親がテレビを見ながらくつろいでいた。

「なんで母さんがいるんだよ!」

「あら? 自分の家に帰ってきちゃ悪いの?」

「そうじゃなくて仕事は?」

「実は今日ね、仕事がいっぱい進んで早く終わっちゃった」

母さんは「テヘツ」とか言いながら俺に説明してくれた。

いい歳にもなつてテヘツとか恥かしくないのだろうか?

「和也そこに正座」

「なんで!」

この人は俺の心の中でも読めるのだろうか?

「まあね」

「マジで!」

驚いた。この人は超能力者か何か?

ていうか俺にプライバシーは?

「私の前では無に等しいわね」

「もう俺が喋らなくても会話が成立してるんだけど…」

「ちなみにこの能力は和也限定よ」

何でだよ!?

よりもよって何で俺限定!?

「はあ。冗談よ冗談。私にそんなことできるわけじゃない」

「いやでもさつきから思いつきり心の中読まれたんだけど…」

「全部声に出てたわよ」

「え? マジで?」

黙って頷く我が母。

マジでか…

でも俺にはそんな覚えはないんだよな。

「独り言ってそんなもんよ」

そうか。そうなのか。

「ところで俺声に出してないのにまた会話成立したんだけど」

「え? ああ、うん。いや声に出してたわよ。絶対!」

「……………」

何故か妙に焦ってない?

「あ、焦ってなんてないわよ」

「……………」

「和也。しつこい男って…ねえ?」

ま、まあいいか。

これ以上聞かない方が身のためだと思う。

母さんの声のトーンが低くなり、目のハイライトが消えた瞬間俺は本能的にそう思った。

みやのじゅんこ
宮野純子。俺の母親にして天敵。

母さんが敵に回ったら俺は勝てないと思う。

その昔俺が小さい時のこと。

よく母さんに遊び相手になつてもらっていたのだが…

鬼ごつことかゲーム対戦とかで母さんに勝った覚えが一度もない。

鬼ごつこでは母さんが鬼になった瞬間全力で追いかけられた。

小さかった頃の俺にとっては本物の鬼と同じくらいに恐ろしかった。ゲームにしたってそうだ。

母さんは「私あんまりこういうのってやったことないんだけど」とか言ってたくせに、いざゲームをすると圧倒的な差でコテンパンにされ、プライドをずたずたにされた。

他にもたくさんあるのだが、特に酷かったのはかくれんぼだ。

俺が鬼で十数えてから母さんを探したのだが、いつになっても見つけることができなかった。

周りが暗くなってしまったので俺は泣きながら家に帰ると家に母さんがいた。

いくらなんでも小さい子供を置いて家に帰るのは酷いと思う。

家が近かったからよかったものの、下手をしたら迷子になって帰ることができなかったかもしれないし、事故にあってたかもしれない。昔そのことについて文句を言ったところ「ちゃんともしもの時の対策はあったわ。私が無計画に子供を置いて帰るわけないでしょう」と言われた。

俺としては置いて帰らないでほしかったが…

そんなこんなで俺は母さんにはできるだけ逆らわないようにしている。

歳は知らない。

特に興味もないしな。

一度だけいくつなのか聞いたことがあった。

「永遠の十七歳よ」とか言ったのを鼻で笑ったのだが、その後の記憶がない。気が付いたら次の日になっていた。

仕事は…あれ？

仕事は何してたっけ？

思い出せない。

「母さんって仕事は何してるの？」

せつかなので聞いてみた。

「あれ？ 昔に言わなかったっけ？」

「いや覚えがない」

「昔何度も聞かれたことあるんだけど」

俺って忘れっぽいのかな？

「それで何やってるの？」

「そんなことより今日の晩御飯は何？」

「何だよ。いきなり」

「私お腹すいちゃって」

「ていうか家に居るんなら母さんが作ってよ」

「仕事で疲れちゃって」

「そのセリフ今日で何度目だよ。ここ最近母さんの作った飯食った覚えはないんだけど」

「そうねえ。私もここ最近料理した覚えがないわね」

「だったらたまには料理した方がいいよ」

「まあまあ。で、今日の晩御飯は何？」

「そんなに料理するのやだ？」

「言わなくてもわかるでしょう？」

「ですよー」

「で、今日の晩御飯は何？」

「はあ。ちよつと待って」

冷蔵庫には…思ってたよりも材料あるな。

「なんか食べたいのある？」

「えーと、肉じゃがとか」

肉じゃがね…

この材料なら作れそうだし。

「わかった。今から作るわ」

さっさと作ることにした。

…あれ？ 何か忘れてるような？
まあいいか。

それからしばらくして

ガチャッ

「ただいま」

父さんが帰ってきた。

みやのけんこ

宮野健斗。母さんとは大学で知り合ったとか。

「あ、お帰りなさい」

母さんが父さんに近寄っていく。

うちの両親は結構仲がいい。

他の家がどんな風かは知らないが、うちはホントに仲がいい。

「和也。ただいま。」

「お帰り」

「お、また和也が料理してるのか」

「母さんじゃなくて残念だったね」

「いやいや、そんなことないぞ」

「でも母さんの作ったご飯の方がいいでしょ」

「まあ純の作った料理も食べたいな」

「えゝ!? なら私が作ったのに」

ミスった。こんなことなら「父さんも母さんの作った飯が食べたいんじゃない?」とか言うんだった。

母さんは父さんには結構あまい。

怒るときは怒るし、喧嘩だつてするがすぐに仲直りする。

他の人たちが見てもお似合いの夫婦なんだと思う。

「父さんも仕事今日は早いんだね」

「ああ。今日は順調に進んでな」

父さんの仕事は…

…あれ?

「父さんって仕事何してるんだっけ?」

「ん? 前に言わなかったか?」

「うつん。覚えがない」

「そうだったか。ところで今日は肉じゃがなんだな」

「その手は効かないよ。さっき母さんにも…」

……
「あ！？ 母さんに話誤魔化された！！」

「あら。ついにばれちゃった」

まったくきずかなかった。

「昔はこれでころつと忘れてくれたのに」

「……………」

思い出した。

昔何度か母さんに仕事のことを質問はしたが、そのたびに誤魔化されていた。

道理で仕事何してるかわからないわけだ。

「ところで仕事全部終わらせてきたの？ 私より量あったけど」

「まあね。今日の分は何とか」

「待った待った待った。まさか……」

「ええそうよ。私たち同じ職場で働いてるの」

新事実発覚！！

「はあ。で、二人は何の仕事してるのさ」

「ふ、子供のあなたにはまだ早いわ」

「え、ちよつと何の仕事してるの？ マジで」

母さんに聞いてもまた誤魔化される気がするので父さんの方を見て聞くと

「そうだね。和也にはまだ早い」

マジでこの人たちは何をしてるんだああああああああ！！

「え、ホントに何してんの？ やばいこととかしてないだろうね！

？」

「そんなことはしないわよ。至って普通の仕事」

「ホントだろうね。ならいいんだけど……」

なんだか両親が急に恐ろしくなってきた。

「父さん仕事のこと教えてくれない？」

「俺はちよつと着替えてくるな」

父さんは自室に着替えに行ってしまった。

逃げたよあの人。

「母さん…」

もうなんか疲れた。

「和也。しつこい」

凄くドスの利いた声で言う母さんを見た瞬間

「もうすぐ飯できるから」

無理だと悟った。

これ以上はもう無理だ。

今日はこれくらいにしておこうとそう思った。

「卵焼きの味付け変えたの？」

現在食事中。

「まあ。不味い？」

昼にも卵焼きは食べたが、味を覚えているうちに作っておきたかった。

長塚の卵焼きにはまだほど遠い出来だけど…

「そんなことはないけど珍しいわね」

「何が？」

「和也ってあんまり味付け変えたりしないじゃない」

確かに母さんの言うとおりだ。

とりあえず作れるようになったらそれでいいと思っているので、俺は味付けを変えたり、作り方を変えろといったことはしない。

「でもこれはこれでいいんじゃないか？」

そう言ってくれるのは嬉しいがこれは失敗作だ。

俺が目指してるのは長塚が作った卵焼きだ。

「ところで和也。学校は楽しい？」

なんかベタな質問だな。

この質問何回かされた覚えがあるんだが…

「ぼちぼち」

そういうと、父さんと母さんは二人して驚いた顔をした。

「えっと…どうかした？」

「いやまさかあなたの口からそんな言葉が出てくるなんて…」

「どういうこと？」

「だって今まで楽しいかって聞いても、別にとか、普通とか、いつも通りとかしか言わないじゃない」

「そうだったか？」

「何かいいことがあったの？ 友達できたとか？」

「そう言われて何となく長塚が思い浮かんだ。」

…友達か。

高校に入ってからあんまり人と関わらなかったからな…

高校で一番仲のいい奴はと聞かれたら俺はおそらく長塚が頭の中に浮かぶと思う。

高校に入ってからあそこまで俺に近づいてきたのは長塚だけだからな。

「…友達かどうかはわからんけど、話し相手ならできたかな」

「そついうと母さんは嬉しそうに」

「そつ」

と言って笑っていた。

父さんは

「その子うちに連れて来たらどうだ？」

なんて言い出した。

その後二人にそいつはどんな子なのかと問いただされたが、すべて聞き流し晩飯を黙々と食べ続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2726x/>

孤独な俺と無邪気な君と

2011年11月21日17時24分発行